

豊富町稚咲内海岸線で美化清掃活動に汗流す

エコツアーinサロベツ

10月21日22日



小学生・幼児も12名参加＝人海戦術でゴミ拾い

北海道最北に位置する豊富町は、礼文利尻サロベツ国立公園のほぼ真ん中にある。同町から稚内まで続く稚咲内海岸に沿って続く道路には、視線をさえぎるものがなく、利尻富士を横目に見ながらのドライブは最高の解放感に浸ることができる。他方、内陸に目をやれば2万3千畝のサロベツ湿原や日本一広い大草原が我々の目を楽しませてくれる。とりわけ、サロベツ湿原は高緯度にあるため、標高5㍍以下の平原でもワタスゲやエゾイソツツジ、エゾカンゾウなど貴重な高山植物が生息。また、キビタキやオオワシ、オオヒシクイなどの渡り鳥がやってくる。まさに、希少動物にとって自然のゆりかごとになっている。おりしも、10月下旬から天然記念物のオオヒシクイが渡来し、湖沼や収穫の終わった畑で餌を食べている光景が随所で見られる。

もっとも、こうした自然の豊かな豊富町でも、一歩海岸線に足を踏み入れば、目を覆いたくなるようなゴミが山積み。網やブイなどの漁具やタイヤなどの産業廃棄物のほかに、韓国やロシアから流れ着いたと思われる漂着物もチラホラ。北海道海浜美化を進める会（事務局・札幌、水崎呈会長）では、地元のボランティア団体NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク（斉藤慶四郎会長）と協力して「エコツアー・イン・サロベツ」を10月21日、22日に実施。サロベツの自然の素晴らしさに触れると同時に、稚咲内海岸のゴミ清掃を行うことで双方の連携強化を図るといふもの。

（裏面に続く）



海浜清掃で地元民と交流 人の温もり実感



トナカイ牧場などを見学



第1日目は、大自然に囲まれる豊富町の名所ばかりでなく、隣町幌延町のトナカイ牧場まで足を伸ばした。小学生以下12人を含む参加者35人は、餌をやりながら記念撮影をするなど初めて見るトナカイに大はしゃぎ。日本一広い大草原では乳牛を追いかけながら、北の大地・北海道の息吹を感じた。

第2日目は、あいにくの雨だったが、地元の人々ばかりでなく稚内のボランティアグループも参加しての活動。強大な流木が散在する中でゴミ拾いは、その量が余りにも多いため、一時間半にわたる清掃活動でも浜辺が綺麗になったとは言いがたい状態だった。それでもサロベツ・エコ・ネットワークの熊谷千恵子さんは、「北海道海浜美化を進める会との連携は今回で3回目ですが、1日目の夜に活動状況や今後の方向性など互いに心を割って話すことができました。都会のボランティア団体と田舎のボランティア団体が連携をもって活動するモデルになると思います」と語る。一方、水崎会長は、「環境保全への取り組みは、結局のところ運動に携わる人々の心の問題に帰着する。田舎の自然の素晴らしさや人々の心に触れることは、子どもの教育にとって最高の教材になる」という。

参加者の感想

やってみて環境セミナーと見た目が全然違って、たくさんのゴミや流木がいっぱいあって、すごく疲れました。あと風も強くとても寒かったです。また行きたいなと思いました。温泉も楽しかったよ。
(5年生、男)

海はきれいな所だと思っていたけど、とても汚れていたのがビックリしました。外国のゴミがあったり、タイヤやテレビも落ちていました。また来たいです。露天風呂に入りたいです。
(6年生、女)